

坂城都 陽太

幸せの国の物語

～5つの正しい心をめぐる冒険～



青山ライフ出版

この物語は

まず初めに、約束を守れなかった小さな仲間たちに

次に、いつも明るく元気なかわいい二人のお友達に

そして、大病で生死をさまよい、打ち勝った弟へ

最後に、この物語を書ききつかけと勇気を与えてくれたあの人に

このすべての人たちに感謝してこの本を贈ります

坂城都 陽太

今日も、やっと学校が終わった。

こんな風に思うのは、そう、僕は今、学校でいじめられているから。でも学校でいじめられているのは、実は僕だけじゃない。

かけっこで一番の子は靴を隠されたり、給食をいっぱい食べている男の子は太っているって言われたり、かわいい女の子はもうそれだけで無視されたりしている。

いじめられている子たちに共通しているのはみんな気持ちが優しいってこと。

そして僕はみんなより少しだけ話すのが遅くて黙っていることが多いから「あいつはトロい」とか「何考えてるか分からない」なんて言われながら、みんなからかわれたり気持ち悪がられたりしている。

だけどそれは……、僕はみんなと違ってサツと言葉が出てこないだけだし、それに僕が話そうとしたって、その時はもうみんなの話が終わっているからなんだけど……。

だから僕はそんな時いつも笑っている。なぜだか分からないけど……、たぶん怖いからなんだと思う。

そして寂しくなると僕はいつも図書館に行くことにしている。

図書館は静かでいろんな本がいっぱいあるし、そこで読書をしたり一生懸命勉強している人

たちを見ているとすぐ落ち着くから。

もちろん本を読むことは大好きだし、それに何よりも本を開いた時のあの匂いが好きなんだ。本を読むというんなことを教えてくれるし、どんなところだつて連れて行ってくれる。世界各地といった場所だけでなく、過去や未来という時間にもね。あつ！ 物語の世界や夢のお話の中にも入っていくことができるよね。

そして僕は本の中ではよく会話をしている。本の中の住人はいつも僕の言葉を待ってくれるし、僕の話聞いてくれるから。

気持ちを落ち着かせたくて、今日も僕はここへやって来た。いつもの見慣れた風景に受付の優しいお姉さん。そしてたくさんの本に囲まれて、やっと僕はほっとすることができた。

今日はどれにしようかな？ そんな風に考えながらなんとなく歩き回っていると、いつの間にか見慣れない空間に迷い込んでいた。

「あれ？ こんなところあつたっけ……」

うす暗い中、本棚の姿をした大きな壁が僕をおおいかぶさるように奥まで立ち並んでいて、その先は真つ暗でよく分からなかった。

周囲を見渡しながら進んでいくと本棚はどれも古びて薄汚れていて、陳列された本はみんな

チリやホコリをかぶっていた。そして本の背表紙を目で追っていくとどれも見たことのない文字が書いてあった。

「これなんて読むんだろう？」

そうつぶやきながらとりあえず目の前の本に手をかけようとした瞬間、カタツと後ろから音がした。僕はびっくりして振り返ると下から二段目の棚からすぐ立派な本が一冊、音もなくゆっくりと足元に落ちてきた。

僕はしゃがんでその本を手に取り、かすかに届く光をたよりに目をこすりながら表紙を読んでみると、そこには『……の国の物語』と書いてあった。

「なんだ、これ？」

辺りは物音ひとつなく、ここにいるはずの人たちの気配もまったく感じられなかった。暗がりの中、この奇妙な空間に閉じこめられてしまったみたいだけど、僕はそんなことよりもこの不思議な出来事と変わった本の存在の方が気になってしまい、思わずその物語の扉を開いてしまった。

すると大好きなあの匂いが僕を包み込み、開いた本のページがパツと光ってまぶしく輝き始めたら……

気が付けば僕は草木がうつそうとした茂みの中に横たわっていた。

一度、頭を振って周囲を見渡してみる。

「ここはどこ？」

「どうしてこんなところにいるんだろう？」

「確か図書館にいたんじゃない……」

いきなりこんなところに放り込まれたから何が何だか分からなくて、僕は怖くて泣きたい気持ちになった。

辺りはもうすっかり暗くなっていたけど、大きくてまん丸いお月様と無数に光り輝く星たちが僕を明るく照らしてくれていた。だから僕はちよつとだけ勇気を出して立ち上がるとその月明かりを頼りにもう一度周囲を見渡してみた。

そこにはいくつものバラの茂みがあったけれど、花は枯れていて枝の鋭いトゲがむき出しになつてからまり合っていた。そして茂みと茂みの間にはクモの巣が貼り巡されていて、よく見ると大きなクモが一匹、風に揺られながらこちらをうかがうようにそこを陣取っていた。

ここへきて初めての生き物だ。

「こんばんは」

さみしかった僕は動くものなら何でもいいと思ってこのクモに声をかけてみたんだ。するとそのクモは巢を揺すりながら大きな眼をエメラルド色に光らせて、

「お前は誰だ、ここへ何をしに来た！」

って僕に聞き返してきた。そして辺りの茂みから無数のエメラルド色の光とともにざわめく音が鳴り響くものだから、僕は驚いて一歩後退りすると「ガシャ！」って音とともに何かを踏んづけてしまった。

足元を見ると金色の石を運ぶアリの行列があつて、僕がその上を踏んでしまったせいでアリたちの列はみだれ、その石があちこちへと散らばっていた。

「きれいな石だな。これって金？」

そう言いながら僕がその石を拾おうとすると、

「触るんじゃない！」

とその大きなクモが声を張り上げた。

僕はびつくりして手を引っ込めるとそのクモは、

「あのバカどもめ、また悪さをしに来よったか……」

と言いながら糸を伝って地面に降りていくとアリたちは一目散に逃げていった。

「どこの誰だか知らんが、お前さんはこのしきたりを知らんようじゃの」

大きなクモは僕に向かって優しく話しかけてきた。

「僕は優（ユウ）。よくわからないけど気が付いたらここにいたんだ……」

「また一人、この世界に迷い込んできよったか。わしの名はパウク。今は魔法をかけられこんな姿になってしまったが……、それでも一応はこの国の騎士、この城を守っているおいぼれじゃ」

「パウクさん、初めまして。あのー、すみません。ここはどこですか？ しきたりって何ですか？ この石がどうかしたんですか？」

「ここは『……の国の物語』の中にあるファリス王国じゃ。お前さんは運が良かった。何も知らないよそ者はたいいていその石に手を出しておかしくなってしまう。あの石は金なんかじゃない、生き物を惑わす悪魔の石じゃ。そう、人ばかりじゃないそのアリでさえもの……」

「そんな恐ろしい石があるなんて知らなかった。助けてくれてどうもありがとう。でも……、でもこれから僕はどうなるの？ ちゃんとお家に帰れるの？」

パウクおじさんが教えてくれた話はさらに僕を不安にさせたから思わず「帰りたい」って言葉が出てしまった。僕は切羽詰まって、どうしたらお母さんのところに戻れるのかパウクおじ

さんに聞いてみた。

「残念ながらお前さんをもとの世界に戻す方法はわしも知らんのじゃ。だが、この先にある城に行つてこの国の王子に会えば何か分かるかも知れん」

そう言つてパウクおじさんは巢の真ん中まで戻ると、さつきまで陣取つていたところにあつた糸の塊をほどこき始めた。そこには赤地にクモの姿をかたどつた金貨が一枚埋め込まれていた。パウクおじさんはその金貨を僕に差し出すと今度は自分の体から糸を紡ぎ出し風に乗せて遠くまで飛ばし始めた。

「さあ、この糸をたどつて城まで行きなさい。そして何か困つたことがあつたらその金貨を見せるといい。きつと何かの役に立つじやろう。くれぐれも途中で余計なものに手を出さぬようにな」

こう言つてパウクおじさんは僕を送り出してくれた。

「どうもありがとう。僕行つてくるよ」

彼の話からすれば僕は今とんでもないことになっているということなんだけれど、それでもパウクおじさんが優しくしてくれたから僕は一人じゃないと思えるようになってきた。とにかく今は諦めないで前へ進もう、僕はそう心に決めるとお城がある方をじつと見つめた。

そんな僕の姿を見てパウクおじさんが勢いよく目を光らせると、他の茂みにいるクモたちもその光に合わせていつせいに目を光らせ始めた。それはまるで僕の出発を励ましてくれているようだった。たくさんのクモたちに見守られながらおじさんの糸が道案内をしてくれたおかげで、僕は無事にお城までたどり着くことができた。

パウクおじさんの糸を頼りに僕はこの国のお城といわれる建物の前に立っていた。目の前にそぼ立つ城門は確かに立派だったけれど、土色の壁はあちこちにヒビが入っていて多くのツタが無数に絡みついていた。

僕がこの大きな門の扉を開けようとするといきなり後ろから声をかけられた。「お前は誰だ！」ってね。

僕は注意深く辺りを窺って返事をする、突然暗闇から人影が現れた。でもよく見ると目の前に立っていたのは僕と同じくらいの背丈をしたヒキガエルだった。

彼との出会いはすごく奇妙で滑稽な出来事だったけれど、もうこの頃の僕はここでは何が起こつても不思議ではないって思っていたから、僕はそのカエル男に「ユウ」って名前を伝えたんだ。でもやっぱり少し怖かったけどね……。